

気管支喘息児の施設入院療法における性格 の変化と喘息の予後との関連—家庭背景に関して— (分担研究：長期療養児の心理的問題に関する研究)

岡田正幸、土居 悟、井上寿茂、高松 勇
村山史秀、亀田 誠、豊島協一郎

要約：Y-0性格検査を用いて、大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科において施設入院療法を実施した小中学生、男子84名、女子57名、計141名の入院中の性格変化と退院1年後の喘息重症度等との関係を前年度に検討し、男女とも入院中に情緒が安定すると喘息症状の改善度がよいことが示唆された。今回家庭背景要因が退院後の経過に及ぼす影響を施設入院中の性格変化との関連で検討した。その結果、施設入院中に情緒が安定した群、変化しなかった群、不安定化した群の各群において片親家庭の頻度と喘息症状の改善との間に一定の傾向はみられなかった。

見出し語：気管支喘息児 施設入院療法 Y-0性格検査 入院中の性格変化 情緒の安定 退院1年後の喘息症状
家庭背景 片親家庭

研究対象：前年度と同じ対象で、羽曳野病院アレルギー小児科において、1986年1月から1992年10月までに施設入院療法を受けて退院した小、中学生気管支喘息児、男子124名、女子76名のうち、入退院時にY-0性格検査（以下Y-0検査）を実施し退院1年後の経過を追跡できた、男子84名、女子57名、計141名。複数回にわたって施設入院した者は初回時を対象とした。

研究方法：施設入院退院後の家庭の受け入れ体制で、子どもの養育において親の負担の大きい片親家庭（父子家庭、母子家庭）の頻度を施設入院中に情緒が安定した群、変化しなかった群、不安定化した群ごとに調べ、退院1年後の喘息症状の変化との関連を検討した。

研究結果：対象の片親家庭の頻度は、男子は84名中11名、13.1%で母子家庭のみであった。女子は57名中10名17.5%で父子家庭1名、母子家庭9名であった。

男子の片親家庭は11名で施設入院中に情緒が安定した群では片親家庭はみられなかった。変化しなかった群では片親家庭は9名で退院1年後の喘息症状の（悪化+不変）14名中3名、21.4%、（1段階の改善）22名中5名、22.7%、（2段階以上の改善）23名中1名、4.3%であった。不安定化した群10名では片親家庭は2名で（2段階以上の改善）

4名中2名、50%であった。（表1）

表1 退院1年後の経過と家庭背景

喘息重症度変化		情緒安定化(15)	不変(59)	情緒不安定化(10)
男	悪化	0/3 0%	3/14 21.4%	0/3 0%
	不変			
子	改善1	0/4 0%	5/22 22.7%	0/3 0%
	改善2≤	0/8 0%	1/23 4.3%	2/4 50%

*表中の数字は片親家庭の頻度

**喘息重症度の変化は発作強度及び頻度が増したものが悪化、変わらないものが不変、1段階の改善が改善1、2段階以上の改善が改善2≤

女子の片親家庭は10名で情緒が安定した群では片親家庭は3名で（2段階以上の改善）7名中3名、42.9%であった。変化しなかった群では片親家庭は6名で（悪化+不変）7名中1名、14.3%、（1段階の改善）11名中4名、36.4%、（2段階以上の改善）11名中1名、9.1%であった。不安定化した群では片親家庭は1名で（悪化+不変）5名中1名、20%であった。（表2）

大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科

Department of Pediatric Allergy, Osaka Prefectural Habikino Hospital

表2 退院1年後の経過と家庭背景

喘息重症度変化		情緒安定化(14)	不変(29)	情緒不安定化(14)
女	悪化 不変	0/4 0%	1/7 14.3%	1/5 20.1%
	改善1	0/3 0%	4/11 36.4%	0/3 0%
子	改善2≤	3/7 42.9%	1/11 9.1%	0/6 0%

*表中の数字は片親家庭の頻度

**喘息重症度の変化は発作強度及び頻度が増したものが悪化、変わらないものが不変、1段階の改善が改善1、2段階以上の改善が改善2≤

考察：男子では、片親家庭の頻度は施設入院中に情緒変化がみられなかった群で退院1年後の喘息症状の変化で（悪化+不変）群と（1段階の改善）群がいずれも20%強で（2段階以上の改善）群より多かったが、情緒が不安定化した群では、逆に（2段階以上の改善）群が50%と多く、施設入院中の情緒の変化と退院後の喘息症状の改善の関連に片親家庭が及ぼす影響には一定の傾向はみられなかった。

次に、女子の片親家庭の頻度は情緒の変化がみられなかった群で（1段階の改善）が36.4%、情緒が不安定化した群で（悪化+不変）が20%と多かったが、情緒安定化群では（2段階以上の改善）が42.9%と多く、男子と同様に片親家庭の頻度と喘息症状の改善度との間には一定の傾向はみられなかった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:Y-G 性格検査を用いて、大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科において施設入院療法を実施した小中学生、男子 84 名、女子 57 名、計 141 名の入院中の性格変化と退院 1 年後の喘息重症度等との関係を前年度に検討し、男女とも入院中に情緒が安定すると喘息症状の改善度がよいことが示唆された。今回家庭背景要因が退院後の経過に及ぼす影響を施設入院中の性格変化との関連で検討した。その結果、施設入院中に情緒が安定した群、変化しなかった群、不安定化した群の各群において片親家庭の頻度と喘息症状の改善との間に一定の傾向はみられなかった。